

1. 特に効果的であり改善に資した事例
D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化
①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実

D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化

①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実

《人社系》

●京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科東南アジア地域研究専攻

「研究と実務を架橋するフィールドスクール」の事例

（具体的に何を実施したのか）

フィールド講義・演習（フィールドスクール）を実施した。1年間のうち、アジアとアフリカそれぞれ1～2ヶ所に1～2週間フィールドスクールを開校し、より多くの院生が、本研究科や海外カウンターパート機関の教員、開発実践の現場で活動する人々から教育を受ける機会を得た。

（実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと）

フィールドスクール開始まえには、スクールが開校される予定の国や地域に関する概説的な講義を開講し、フィールドスクールでは本研究科教員と現地で活躍中の実務家（JICA、国際機関、各種NGO）による現場での講義を実施し、現地の人々とともに演習を行うなど講義、演習、実地見学を組み合わせることで参加者の理解が段階的に深まるように工夫した。また演習で得た知見を地元学生らと共有する機会を設け、さらなる自学自習のインセンティブとなるように考慮した。

（どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか）

2008年度～2010年度の3年間で、合計7つのスクールを開校し、のべ70名の院生が参加した。これまで以上に、院生を臨地研究の現場へと派遣することができ、大学院教育の改善・充実に貢献した。

●長崎大学経済学研究科経済経営政策専攻

「新興金融市場分析の専門家育成プログラム」の事例

（具体的に何を実施したのか）

- ・新興金融市場分析に必要な情報収集能力等を向上させるために、東京研修及び中国でのフィールド研究を行った。東京実習は、東京証券取引所等において、市場構造や取引慣行を学ぶことによって、中国でのフィールド研究の参照基準を形成することを目的とし、夏季休業期間に実施している。中国でのフィールド研究では、博士前期課程2年次第2 Semesterに、西南財経大学において、現地大学教員による講義のほか、地元金融機関など金融市場参加者へのヒアリング等による情報収集を行った。

（実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと）

- ・東京実習では、東京証券取引所との間でカリキュラムの内容の打ち合わせを行い、「日本経済と証券市場の機能・役割」等を内容とすることにした。このほか、大和ホールディングスやあいおいニッセイ同和損害保険などの協力を得て、証券会社や機関投資家の立

1. 特に効果的であり改善に資した事例
D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化
①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実

場からの研修を受けることも可能となった。

- ・中国でのフィールド研究を円滑なものとするため、「アジア市場分析 I」で招聘した西南財経大学の教員と学生が事前に研究テーマについての話し合いの場をもったり、テレビ会議システムを利用した事前指導を行ったりした。他方で、学生が滞在中に、現地で反日デモが発生し、学生に危険がないかが心配されたため、現地の大学と頻繁な情報のやりとりを行うことがあった。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

- ・東京実習は、博士前期課程 2 年次生のほか 1 年次生も参加可能とした。これにより、1 年次では東京証券取引所などの現状を理解し、2 年次には各自のテーマや問題意識に基づく情報収集が可能となった。
- ・中国でのフィールド研究の成果として、修士論文の作成に必要な資料や情報収集を行うことができたことと、西南財経大学の教員による適切な指導を受けることによって、論点整理や論文の改善ができるなどの成果が見られた。
- ・学生によるアンケートでも、金融についての視野が広がったという感想や、同じ金融市場について日本と中国とにおいて捉え方が違うことがわかったという感想がみられた。東京研修や中国でのフィールドワークの目的が達成されているといえる。

●女子美術大学美術研究科芸術文化専攻

「表現空間創出による高度人材育成と職域開発」の事例

(具体的に何を実施したのか)

芸術関連分野で活動する諸機関（アートセンター、海外文化支援財団、地方自治体、出版業界）との間で、必要不可欠であるにもかかわらず、可視化されてこなかった職域について討議を重ね、これまでになかたちでのインターンシップを実現することができた。また、そのためのフィールドワーク自体をひとつの研究実践と捉え、印刷、展示、ディスカッション・イヴェントなど、多様なかたちで発表することができた。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

協働する機関によって、実現可能なインターンシップの在り方が異なるために、個々に細部にわたって注意する必要があるがあった。海外の団体と協働で行うプロジェクト (video exchange program) では、大学院生、ディレクター、教員など、担当者の立場も異なるため、共通のプラットフォームの構築に配慮した。フィールドワークの実施、およびその成果の発表については、既存の枠にとらわれることなく、目的の効果を上げるべく、大学院生を含めて協議を重ねた。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

従来、芸術において補助的であるとされてきた、フィールドワーク、アーカイヴ構築、インタビュー、記録報告などの作業を、積極的にひとつの職域として捉えようとする試み

1. 特に効果的であり改善に資した事例
D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化
①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実

を通じて、制作ではない芸術文化系の研究を進める大学院生に対して、芸術分野における主体的な役割の可能性を、多様なかたちで提供することができた。また、個々の大学院生のみならず、大学院自体が、芸術分野での主体的な役割を、従来よりも積極的に意識し、また柔軟に捉えるための契機となった。

●南山大学国際地域文化研究科国際地域文化専攻

「多文化社会対応企業人・教員養成プログラム」の事例

(具体的に何を実施したのか)

文化的・多文化共生のダイナミズムとその展望に関して現実感覚を豊かにする目的のもとに、授業科目「国際地域文化プロジェクト研究」の一環として、本研究科の提携する官公庁の国際交流事業部門、NGO、NPO等で行われているインターンシップの充実を図り、多文化共生の現場での様々な実地活動に従事する機会を可能な限り提供した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

初年度と最終年度において、受け入れ先機関・団体の各担当者をパネリストに迎えミニシンポジウムを開催し、そのミニシンポジウムの中で各受け入れ機関・団体のインターンシップに参加した院生の体験報告会を行った。そして、各院生はそれぞれ研究テーマをもってインターンシップに参加し、体験報告とその成果については、それぞれ『インターンシップ報告集第1号』(2009年3月)、『インターンシップ報告集第2号』として刊行された。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

インターンシップに参加した院生は、多文化共生を目指す現場における様々な課題について多くを学ぶ機会を得るとともに、「国際地域文化プロジェクト研究」ミニシンポジウムにおいて、参加院生は、受講者によるインターンシップ活動の成果を共有したのみならず、パネリストによる適確なコメントとともに、自らの実地体験の成果を他の院生との間で共有できたことも、国際協力や多文化共生について理解を深める上で極めて有意義であった。

●立命館大学政策科学研究科政策科学専攻

「地域共創プロデューサー育成プログラム」の事例

(具体的に何を実施したのか)

「地域共創サイト」と称する国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの受け入れ機関との連携関係を構築・強化することができた。このことによって、院生の研究の素材をより具体的に獲得することができ、また、現場の実務者・経験者の説明・アドバイスをきめ細かく受けることができ、分析を詳細にすることができるなどの研究上の効果があった。

1. 特に効果的であり改善に資した事例
D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化
①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

各サイトの主担当者を1名定め、9カ所におよぶ地域共創サイト(市町村、NPO、財団法人など)と大学院生派遣や研究活動の推進に関する学術交流協定の締結を行った。これにより、派遣時の連絡調整や派遣後のフォローアップ等、事業の継続性確保のための維持管理体制を構築した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

大学院生の修士論文や教員の研究活動のための現地調査において、関係機関との事前調整の負荷を節約しつつ、大学と現地の双方の需要にマッチした研究テーマの選択が可能となった。

●関西大学総合情報学研究科社会情報学専攻

「参加連携型の大学院教育による社会創造」の事例

(具体的に何を実施したのか)

情報手段を用いて社会を創造する力を持つ人材の育成のために、国内外の組織(他大学、学校現場やNGO/NPO、国連機関など)と連携した共同プロジェクトに取り組むとともに、それぞれの組織へのインターンシップや、フィールドワークを継続的に実施した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

インターンシップや、フィールドワークに参加する学生の評価を工夫した。web2.0ツールを用いることにより、学外における学生の研究活動を教員が把握する試みを導入し教育に活かした。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

海外でのインターンシップやフィールドワークは、他大学の活動モデルとなっている。たとえば、日本福祉大学では、毎年カンボジアや台湾などでの海外研修プログラムを実施しているが、その運営方法は本プログラムの手法や考え方を参考にしている。京都外国語大学においても、インドの大学生と連携をして、フィールドワークを行う海外活動が実施されている。摂南大学でも、本プログラムの仕組みをフィリピンのフィールド学習に応用している。

●吉備国際大学文化財保存修復学研究科文化財保存修復学専攻

「グローバルな文化財修復技能者の実践的養成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

- ・国際的に活躍できる文化財修復技能者を養成する方法の一つとして、海外インターンシップを毎年実施している。従来、東洋美術分野の米国・ボストン美術館を派遣先としていたが、本プログラムからは、さらに西洋美術、文書典籍、および漆工芸品分野の米国

1. 特に効果的であり改善に資した事例
D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化
①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実

およびヨーロッパ諸研究施設や美術館にも大学院生の派遣先を拡充した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

- ・それぞれの修復分野で研究活動を行う大学院生が海外インターンシップの対象となるよう、各分野の教員が派遣先の開拓に努力した。
- ・外国語教育を取り入れたことで、大学院生自ら相手先への受け入れ願いや現地での実施項目など、インターンシップ開始前の打合せ等がスムーズに進められていた。このような事前の準備があったことから、派遣された大学院生は、定められた1ヵ月間のインターンシップ期間に当初の目的以上の成果を得たことが事後の報告会で確認することができた。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

- ・インターンシップ派遣先を拡大することで、東洋美術修復研究、西洋美術修復研究、文書典籍修復研究、あるいは漆工芸品修復研究を専攻する大学院生個々の修学意欲を喚起することができ、インターンシップ派遣先の修復技能者と派遣された大学院生との今後の人的交流が期待されるようになった。

〈理工農系〉

●筑波大学システム情報工学研究科コンピュータサイエンス専攻 「ICTソリューション・アーキテクト育成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

各学生の個別研究テーマに沿って、主に海外の大学及び公的研究機関に最低1、最長3か月という比較的長期間での滞在型研究を実現するインターンシップを授業として実施した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

インターンシップを授業として位置づけ、派遣先組織の教授または主任研究者との研究計画及び進捗の打ち合わせ、研究室の学生またはポスドク研究者とのディスカッション、研究報告を通して、国際的な枠組みの中での共同研究の進め方や研究に対する考え方を身につける機会を提供した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

主体的に海外での研究を実施したことから、受講した学生はいずれも価値観が変わる程の経験をしたと述べるなど、インパクトのある授業となった。実際に共同研究として結実する成果も得られた。

- | |
|------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1. 特に効果的であり改善に資した事例
D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化
①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実 |
|------------------------------------------------------------------------------------------|

●**埼玉大学理工学研究科環境システム工学系専攻**
「地域環境保全エキスパート養成プログラム」の事例

(具体的に何を実施したのか)

大学院課程教育の実質化を図ることを意図した本プログラムにおいては、実践的かつ高度な環境技術者としての能力を高めるために、学生が参加登録する各現場支援型プロジェクトごとに、指導担当教員が学外の連携組織との協議に基づき学外における研究活動の場を設定し、可能な限りインターンシップ科目の単位認定を希望する学生の受け入れ先としての連携協力を求めた。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

学外連携組織の関係者に対して、各現場支援型プロジェクトごとに随時、研究会や報告会を開催するとともに、本プログラム全体としてポスターセッション形式で開催する中間並びに最終の発表会に招待して活発な意見交換の場を形成した。リーフレット、報告書の送付、webサイトの電子メールによる紹介など、多様な手段により活動紹介を行い、継続性のあるプロジェクトの推進に資する他、また新規連携先の開拓を行った。連携組織の関係者には学生のインターンシップの状況及びプロジェクトの推進状況に対する評価を依頼した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

各現場支援型プロジェクトの学外連携組織による評価を見ると、学生の社会性が高まり自覚をもって研究に取り組む意欲や規律の向上が見られたという意見が寄せられているとともに、研究成果に関しても十分な内容が得られたとする見解が示されている。学生による自己評価、指導担当教員による評価においても、同様の結果を得ている。

●**東京大学情報理工学系研究科コンピュータ科学専攻**
「大学連携によるICTリーダーシップ教育」の事例

(具体的に何を実施したのか)

東京大学情報理工学系研究科においてインターンシップを単位として認め、学生が積極的にこの仕組みを利用できるように促す仕組みを整えた。具体的には、修士課程と博士課程にそれぞれ「情報理工学修士 GP 実習Ⅲ」「情報理工学博士 GP 実習Ⅲ」「情報理工学博士 GP 実習Ⅳ」を設置した。それにより、インターンシップを活用する学生が増え、産業界と大学における連携の強化が実現できた。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

インターンシップを単位として認めるにあたり、単位を授与するかどうかを厳しく審査する必要があった。それを実現するために大学院GP運営委員会にて提出されたレポートを元に審査を実施した。また、海外へ長期インターンシップする学生に対する経済的なサポートについても考慮した。

- | |
|------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1. 特に効果的であり改善に資した事例
D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化
①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実 |
|------------------------------------------------------------------------------------------|

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

インターンシップを実施したことで、学生が大学内だけにとどまらず国内外の研究機関や企業と関わり合いをもち、研究の幅を広げられたことが大きい。また、海外に長期インターンシップする学生に対して、旅費として日当を支給する形はとれなかったものの滞在中にかかった実費を精算する形で経済的なサポートを実現でき、学生がインターンシップ・研究活動に集中できる環境を整えられた。本プロジェクトの発足後、著しく国内外インターンシップに出る学生が増えたことは、整備した教育システムが有効であったことを示していると判断した。

●新潟大学自然科学研究科生命・食料科学専攻

「食づくり実践型農と食のスペシャリスト養成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

インターンシップ科目について、博士前期課程は国内の企画実践型インターンシップを、博士後期課程は海外で食づくり国際インターンシップを実施した。国内インターンシップでは、企業の研究所や公的研究機関での2週間程度のインターンシップを、国際インターンシップでは海外の連携大学との研究交流会や農や食の関連施設や企業の見学を実施した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

国内インターンシップでは、事前に訪問する機関の調査を行い、インターンシップ中に調査・検討する目標を立てさせ、漫然と実習するのではなく、明確な目的意識を持った実習とした。インターンシップ後は履修生に報告書を提出させるとともに、インターンシップ先機関の担当者に講評書を出していただき、評価した。国際インターンシップでは、訪問国の研究機関2カ所で英語による研究発表会を行い、そのための事前練習を複数回行って、英語によるスライド作成や発表方法について指導を行った。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

国内インターンシップでは、目的意識を持って実習するため、密度の濃いインターンシップとなり、履修生は多くの事を学ぶことが出来た。このことは、履修生のインターンシップ後の感想によって裏付けられている。海外インターンシップでは、英語による研究交流会で先方の学生・教員らと英語によるディスカッションを行う事で、履修生自身、大きな自信になるとともに、本来の大学院の研究活動にもプラスの効果が認められている。

- | |
|------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1. 特に効果的であり改善に資した事例
D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化
①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実 |
|------------------------------------------------------------------------------------------|

●山梨大学医学工学総合教育部応用化学専攻、機能材料システム工学専攻
「国際燃料電池技術研究者の基礎実学融合教育」の事例

(具体的に何を実施したのか)

修士課程では、インセンティブ・経験を涵養するため海外短期留学または国内燃料電池関連企業でのインターンシップを必須とした(初年度および2年度は博士課程にも適用)。国内インターンシップ先は、パナソニック、東芝、富士電機など燃料電池開発の最先端企業とした。海外留学先は本学と連携を約束しているペンシルバニア州立大学、ポアチエ大学、モンペリエ大学、中国科学院化学研究所などである。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

教員が必ず共に現地へ出向き、海外留学が円滑に進めるよう配慮した。受け入れ先の研究者らは本学の客員教授として特別講義も行い、留学やインターンシップの成果を短期的なものに終わらせず継続させた。さらに、海外連携先の学生を本学で短期間受入れて相互協力関係を構築した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

国内インターンシップにより、企業の開発現場における課題をしっかりと認識することができた。また、自身のキャリアパスについて明確な方向性を持つことができた。海外留学を行った学生は、発表から質疑応答までをすべて英語で行い、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力、ディベート能力を格段に向上させることができた。

●静岡大学情報学研究科情報学専攻

「マニフェストに基づく実践的IT人材の育成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

学生の自己マニフェストを実現するために、特に「研究力」「キャリアデザイン力」「国際適応力」の育成をめざして、「国内外インターンシップ」を実施した。毎年度10~15名を、国外の大学・企業へは約1~2か月間、国内の大学・企業へは約2週間派遣した。大学の場合には、研究・学習を派遣先の教員・学生と協働して実施、企業の場合には実際の企業実務(開発を含む)を体験した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

インターンシップの実施のために、本研究科大学院GPを実施するWGの下に、情報学部キャリア支援室と協働した特別なインターンシップSWGを置いた。このSWGには、国内外の大学・企業との連携に豊富な経験をもつ教員を集めた。インターンシップ期間は短期間であったので、インターンシップ先との事前の交渉を行って、インターンシップ派遣学生が、できるだけスムーズに研究・企業のインターンシップが行えるように準備を整えた。また、インターンシップの募集にあたっては、応募学生がどのように自己マニフェストに、

1. 特に効果的であり改善に資した事例
D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化
①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実

インターンシップという経験を位置付けようとしているかを重視して選考した。インターンシップ前には研修会、後には報告書提出・報告会で発表をさせ、成果の獲得と次年度への他学生への広報を徹底させた。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

インターンシップを経験した学生はいずれも、得難い経験をし、「研究力」「キャリアデザイン力」「国際適応力」が磨かれたと報告書・報告会にて報告している。特に、海外で研修を行った学生は、「国際適応力」とともに、受け入れ先教員と共著論文を発表したり、企業業務の改善提案を行うほどの成果をあげた。修了生へのアンケート調査結果では、回答者（50名）の40%の学生が「国内外インターンシップ」制度を今度も続けるべきであると回答し、実施事業のうちで最も高い評価を受けた。

●岡山大学環境学研究科資源循環学専攻

「アジア環境再生の人材養成プログラム」の事例

(具体的に何を実施したのか)

- ・「プロジェクト実習(学内・地域・国際)」は、平成20年度に2名の学生が参加し、中国において「アジアの都市問題と持続可能な都市環境の調査」を実施した。平成21年度からは、環境学研究科カリキュラムに「アジア環境再生特別コース」が設置され、プロジェクト実習の取組が本格化した。平成21年度は、プロジェクト実習として4テーマが開講され、博士前期課程学生13名が履修し、中国、ベトナム、マレーシア、スリランカにおいて、プロジェクト実習(国際)を実施した。平成22年度には10テーマのプロジェクト実習が開講され、博士前期課程学生21名が、台湾、インドネシア、タイ、ベトナム、中国、マレーシア、バングラデシュ等の大学・研究機関と協力しながら、プロジェクト実習を実施した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

- ・各プロジェクト実習の実施に際しては、本プログラムの運営委員会で内容を精査し、段階的な実習を通じて十分な成果が得られるように配慮した。
- ・受講生が、プロジェクト実習の成果を、各年度末に実施した「アジア環境再生コロキウム」において英語で発表し、開発途上国から招聘した研究者と討議を行うとともに、成績評価にも利用した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

- ・アジア環境再生コロキウムに招聘した開発途上国の大学関係者からは、「ESD実践論」、及び学内・地域・国際「プロジェクト実習」を導入した実践的プログラムに対して強い関心が示され、履修生による実習成果報告に関しても高い評価が得られた。また、岡山大学と開発途上国の大学が連携して、双方向の大学院教育プログラムを構築していくことの重要性が確認された。

1. 特に効果的であり改善に資した事例
D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化
①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実

- ・履修生に対するアンケート調査結果では、従来の講義形式に加え、ESD 実践論や実習が加わり、実践的な内容である点が評価された。特に、プロジェクト実習(国際)に対する関心が高く、履修動機の主要因になるとともに、実習を通じた学びの効果が大きいことも示された。

●九州大学人間環境学府都市共生デザイン専攻

「アジア都市問題を解くハビタット工学教育」の事例

(具体的に何を実施したのか)

現地での課題解決能力の育成のために、本学とアジア大学の大学院生が国際異分野混成チームを複数編成し、対象地区における都市建築の低炭素、長寿命、保存などをテーマとした現地調査、課題抽出・分析、代替案評価、デザイン提案、産業界・行政関係者等を交えた発表会までの過程を集中型ワークショップの形式で実施した。また、海外現地プロジェクトの就業体験を通して実務的な課題解決方法を修得する海外インターンシップを国連ハビタット、国連開発計画、海外設計事務所等と連携して実施した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

アジア大学と共同で実施する集中型ワークショップでは、教員と学生が現地に渡航する前に、安全で円滑なワークショップとするために、複数教員による現地調査を事前に行い、受入側のアジア大学の教員と入念な打合せを行っている。また、国連ハビタット等の現地事務所で行う海外インターンシップでは、学生に対して国連ハビタットによる一定期間の国内研修を行うなど準備期間を設け、海外設計事務所等に送り出した学生も含めて、海外滞在している学生とは定期的にメールで連絡し合い、現況の把握に努めた。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

本プログラム実施前では、海外留学や海外インターンシップを希望する学生は非常に少なかったが、本プログラムによって海外に目を向けて実践力・国際力を身に付けたいとする学生の自発的な意欲が昂進した。学生の意識改革の面で期待以上の成果が得られたと考えている。また、海外インターンシップを経験した学生が海外企業への就職を希望し、実際に数名の学生が海外企業や国連機関に就職し、更に海外インターンシップ先の海外企業から企業奨学金付きのインターンシップ受入の申し出があるなど、新たなキャリアパス形成の可能性も見えてきている。

●大阪府立大学理学系研究科

「ヘテロ・リレーションによる理学系人材育成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

地域社会への公開セミナーに院生を積極的に講師として採用しプレゼンテーション能力

1. 特に効果的であり改善に資した事例
D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化
①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実

を向上させた。

「利休サイエンスレクチャーシップ」を開催し、地域公開型のセミナーを企画した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

専門性のある題材を、あえて非専門的な聴衆にいかにかわかるように伝えるかを自ら考えるように教育した。特に内容を犠牲にすることなく講演の手法を考えるように指導をした。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

相手が理解するかどうかという視点でみずからのプレゼン方法を検証するという一連の作業が体得できたものと思われる。しかも高度な研究成果を伝えるにおいて、極めて大きな努力が必要であることも認識させることができた。

●豊田工業大学工学研究科

「実学の積極的導入による先端的工学教育」の事例

(具体的に何を実施したのか)

本学大学院では「体験的教育」「国際性」を人材養成のキーワードとしており、これまでに学部のみであった学外実習を大学院にまで拡充し、しかも海外への展開もはかるなど、本プログラムの柱の一つに位置づけた。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

- ・本学大学院においては学外実習の実施は初めてであり、パートナー企業・大学の選定を各教員に任せるだけではなく、取組委員会が企業に直接赴くなど積極的に国内外での派遣先開拓に注力した。
- ・派遣先とのマッチングをはかるため、海外派遣学生は英語能力を中心として選考を行い、質の確保には特に注意を払った。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

- ・これまで学部では学外実習の十分な実績があったが、本プロジェクトにて本学開設以来初めて大学院生を国内外の研究機関、企業に派遣し、平成20年度(国内1件)、平成21年度(国外9件、国内17件)、平成22年度(国外7件、国内14件)の実績をあげた。本制度は現在も継続中であり、平成23年度は(国外7件、国内7件)となっている。
- ・学生の自己評価からも、「問題解決能力が身についた」と答えた学生が全員、「コミュニケーション能力の向上」を実感した学生が86%であった。また、8割の派遣先からも同様の評価をいただき、本学の指導教員もその86%が効果的であるとの評価結果が得られた。

- | |
|------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1. 特に効果的であり改善に資した事例
D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化
①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実 |
|------------------------------------------------------------------------------------------|

●同志社大学工学研究科機械工学専攻

「安全・安心の設計システム技術者養成課程」の事例

(具体的に何を実施したのか)

国内外の企業、団体でフィールド実習を行った。1年目の平成20年度は博士前期課程1年次生22名及び後期課程2名計24名が1期生として履修登録をし、事例調査という形で各企業、団体でのフィールド実習を行った。2年目の平成21年度は新たに23名の前期課程1年次生の学生を迎え入れ、計47名の履修者数となった。前期課程1年次生は事例調査、前期課程2年次生、後期課程学生はKY活動として、国内外の実習先でのフィールド実習を行った。3年目の平成22年度は1期生は卒業していなくなったが、新たに前期課程1年次生29名を迎え入れた。4年目の平成23年度からは本課程は本学の正式なコース「安全技術者養成コース」となり、新たに35名の前期課程1年次生の登録があり、「安全安心実習」という形で実習を行った。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

学生の希望を聞いた上で、それにマッチする形での、受け入れ企業探しに苦労した。今回の実習は「安全・安心」をテーマとした実習であり、受け入れ側としても経験がほぼ無く、断られるケースがほとんどであった。受け入れ交渉、特に就職の決まっている博士前期課程2年次生の交渉は非常に困難であったが、本課程の趣旨を説明し、理解を得ることにより、少しずつ受け入れ企業が増えていった。改善点として、当初は大手企業を中心に交渉を行っていたが、中小企業やアミューズメントパーク、地方公共団体等にターゲットを広げることにより、希望する全学生の実習が成立した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

多くの企業、団体での実習を通じて、普段講義では体験出来ない、現場での安全・安心を肌で感じる事が出来た。また、受け入れ先とのコミュニケーションを通して、学生が社会に出た後の職場での人間関係構築の基礎が築けたと考える。受け入れ企業としても、普段気付かない点を学生の観点から発見してもらえ、社員の刺激にもなったとの声も多くきかれた。海外での実習を通して、英語を含む国際コミュニケーション力の大切さを学生自ら体験し、報告会にて実習の成果を英語で発表させることによりグローバルな社会に対応した人材の育成が出来たと考える。

《医療系》

●長崎大学国際健康開発研究科国際健康開発専攻

「国際保健分野特化型の公衆衛生学修士コース」の事例

(具体的に何を実施したのか)

学生に実務能力と問題解決能力を身につけさせるために、1年次に3週間、バングラディッシュにおけるフィールド研修、2年次に8ヶ月間、開発途上国においてインターンシッ

1. 特に効果的であり改善に資した事例 D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化 ①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実

プと課題研究を義務づけた。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

短期フィールド研修においては、引率教員を同行させ、学生には研修効果を上げるための十分な準備をさせた。インターン先と研究課題は、できるだけ学生の自主性を尊重して決定された。しかし、インターン先の決定には、研修内容の有用性、信頼できるメンターの存在、安全性などいくつかの条件を付した。課題研究の遂行には、本研究科と相手国の関係機関の倫理審査の承認を義務づけた。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

短期フィールド研修において、学生は多くのことを学び、その成果を報告書に纏めた。多くの学生は希望した先でのインターンシップと研究を実施したので、インターンと課題研究は非常に有意義であったと評価している。インターンと課題研究は、学生に国際保健に取り組む上で必要な多くのことを学ばせ、また国際保健に取り組む意欲を更に高揚させたことが、帰国後の学生の報告から明らかである。